

博士論文
「厭世詩家としての北村透谷」

陳 璐

課題設定

北村透谷（1868-1894）は明治末から戦後まで長らく「ロマン主義者」として語られてきた。これはすでに日本近代文学史の常識になっている。たが、「日本近代文学史」というもの自体が近代化の産物であり、それは透谷の作品とほぼ同時代に出現し始めたものである。本研究はロマン主義という西洋的符号を用い構築されてきた日本近代文学史の中で透谷を捉えてきた従来の研究から距離を置き、北村透谷の「厭世」思想と表現を、広く東洋的伝統の文化的・思想的地平に置き直すことにより、西洋ロマン主義の枠組みに回収しきれない透谷の「厭世」思想の内実を解明する試みである。

透谷が「厭世詩家と女性」を発表したのは明治二五年二月のことで、同時代から注目を浴びた最初の思想的評論と言える。この評論において、透谷は自らを「厭世詩家」と規定し、社会の既存の規範や倫理を懐疑し、それらに対して反抗する精神を持ち続けることを主張した。また、透谷の友人である宮崎湖処子が「君が厭世は読書社会の認むる処なり」と述べているように、当時の人々も透谷を「厭世家」と理解していた。

本研究では、こうした「厭世」という透谷の思考様式を改めて掘り起こし、キリスト教入信、自由民権運動との関わり、詩作などの彼の諸活動、および他界、内部生命、想像的世界などの彼の創作上の理念が如何に系統的に理解され得るかを分析する。さらに、従来各方面から導き出された様々な透谷像を、「厭世」という思考様式で統一的に把握する。

透谷の厭世は現実からの逃避ではなく、「世」を「厭」い反発する批判精神の現れである。「厭世」の対象は、世俗に存在している既成の倫理や価値観であり、「厭世家」はそれに拘束されない「自分」のあり方を主張する。このように、透谷の「厭世」は現世に「あるもの」を懐疑する精神として、現世に「あるべきもの」を探求していく方法を模索しようとする積極的なペシミズムである。

こうした思考様式に基づき、透谷は内部生命論、詩人論、他界、創造的勢力といった主張を次々と打ち出し、明治近代をめぐる批判を成すと同時に、現実世界の変革を目指した。透谷の主張は、ともすると形而上学的に見えるものの、その着眼と思考原理が現世や国民という現実次元の存在を対象にしている為、透谷の姿勢は依然として政治的で、現実的である。本論は透谷のこうした思考様式を再評価することを第一の課題とする。

第二の課題は、明治元年生まれの透谷と明治以前の思想との関連性に光を当て、彼が陽明学、江戸文化、東洋古典、東洋文化の領域に対していかなる価値観を抱いていたかを検討することである。まず透谷の「厭世詩家」という自己主張における「詩人」に着

目し、各トピックの検討を通して、文学・思想・宗教などの面から自らを「詩人」へと導かんとした志向を具体的に洗い出す。この議論は、日本近代が伝統といかに対峙し、如何に評価したかという問題につながる。

さらに、透谷は生命思想の提唱者でありながら厭世主義者でもあるという一見矛盾するような特徴を打ち出しているが、彼の厭世主義は生命を否定するものではなく、むしろ生命の自由な発展を阻碍する実社会の因習に対する反抗に根差していることを明らかにする。

このように、「厭世」思想と「詩人」との結合が、統一かつ一貫した透谷の全体像を浮き彫りにし得ることを主張したい。従来検討が不十分であった透谷の厭世主義と近代批判との関係、また従来見過ごしてきた透谷と東洋思想・東洋文学・前近代的文化との関連性を検討することによって、西洋中心的に「ロマン主義」の先駆者と言われてきた透谷の本質を洗い直す。

方法論

本論文では主に二つの方法を活用する。一つは、関係性から考え直す方法である。もう一つは、近世と近代の連続性・非連続性を見極める方法である。

まず、関係性から考え直すことについて。本稿は、単に透谷の思想とは何かを考察するのではなく、この思想の生成の土壌、また同時代の他の思想との拮抗関係という関係性から検討する。他の思想との緊張関係こそ、透谷の思想が成立した歴史状況としてまず見極めるべき観点と考える。そこから、思考様式としての「厭世」、また実践主体としての「詩人」透谷が克服する目標とは何か、というイデオロギー問題が新たな対象として改めて浮上してくる。

明治初期には、「近代」はまだ定まらない概念として醸成の途上にあった。一九三〇年代の「日本浪漫派」が近代そのものを批判の対象にしたのと違い、明治初期には異なる思想同士の拮抗や混在自体がむしろ近代的状況であった。ここでは、透谷の「厭世」を一つの「拮抗関係」を示す近代的な思想として考えることで、明治初期における近代の実態を再発見することも目標とする。

次に、近世と近代の連続性・非連続性を見極める方法について。明治以後の日本文学史をめぐる記述の多くは、西洋思想やキリスト教などの受容を主な視座にして、明治という近代を西洋中心主義的に解釈してきた。それらはいずれも明治と近世との関係を非連続なもの見みなすことで成り立った言説であり、それゆえそうした言説に対しては、そもそも近世・伝統との関連性を軽視して「明治」という近代が正確に語られるのかという疑問が残る。

そのため、本稿は、あえて明治という近代が、東洋的伝統や日本近世文化といかなる連続・非連続的な関係を持っているかという視座を取る。特に今まで看過されてきた透

谷の近世文化に対する受容と再評価を分析し、明治の文人の近世観という大きな課題を、透谷を通して具体的に把握することを目的とする。

構成・分析・結論

本書は二部構成である。

第一部は、北村透谷の批判精神を成す厭世思想に関する総論である。北村透谷の「厭世」とは何か、いかに形成され、同時代の他の思想といかなる拮抗関係をもっていたかを掘り起こし、「厭世」が持つその時代における位置づけと役割を明らかにする。また、「厭世」思想が透谷の他の代表的な思想——内部生命、創造的勢力、想世界など——といかなる関係を持っているかを検討することによって、透谷の初期から最後までまでの諸理論を統一的に把握しようとする。

第一章においては、明治二〇年代の『文学界』、三〇年代の『明星』派、また四〇年代の『スバル』を中心とする運動を一律に「ロマン主義」と捉えることを疑問視し、透谷が参与した『文学界』と、与謝野鉄幹・与謝野晶子が主導した『明星』を比較することで、主張と思考様式の差異を捉えようとした。そこで、透谷が日清戦争の二ヶ月前に自殺した事実に着目し、透谷が終始一貫して非戦・平和論の姿勢を崩さなかったこと、そして官能性の美、感覚の解放といった非政治的個人主義を擁護する『明星』派との相違点を明らかにした。

第二章では、透谷の「厭世」思想を改めて掘り起こし、脆弱さや死に直結する行為としての「厭世」思想とは異なる、反抗的・否定的な精神としての透谷の「厭世」思想と明治初期の「厭世」の言説空間を詳細に検討する。この積極的な「厭世」と透谷の代表的な論題である「他界」「内部生命」「創造的勢力」との関係を検討し、透谷の諸言説を統一的に捉えた。

第三章では、これまでほとんど検討されてこなかった透谷の歴史観を検討する。若い頃自由民権運動に参加し、その後政治の世界から文学の世界に移った北村透谷は、一般に文学家・詩人として見なされている。また、キリスト教入信も加え、従来の先行研究は、政治、文学、宗教という三つのジャンルにおいて、北村透谷の各々の側面を捉えてきた。本章は、今まで埋もれていた北村透谷の歴史観の問題に着目し、厭世詩人である北村透谷の歴史観はどのような特性を持っているか、それを踏まえてどのような文学的实践と近代批判を行ったかについて論じることを目的とする。透谷の「未完」に終わった史観の特性は「虚界の創出」にあることを、同時代に思想的に透谷と関わった福沢諭吉、山路愛山、徳富蘇峰らの歴史観と対照しながら示した。

第四章では、透谷が政治から文学へ転向したことに着目しつつ、転向前後において一貫している彼の自由民権思想を検討し、安易なナショナリズムに走らなかった透谷の「厭世家」としての革命的態度を考察する。透谷の「厭世家」としての革命家の態度は、自由民権運動脱退後の彷徨を経験し、明治一〇年代に運動の主体であった「壮士」への

批判、さらに曾て「壮士」であった自己への批判まで降りていきながら、「幾多の苦獄」というモチーフを内面化していく過程であった。これを機に、政治活動で叶えなかった精神の自由を自らの文学的試行の根拠とし、それと相呼応する文学的表象としての他界、想世界といった、現世的価値観では測れないイデア的世界を立脚点としたのであった。こうした文学理論の実践こそ、透谷が一見浪漫的に見えながら、一方では一貫した革命的政治姿勢を帯びている所以である。その点において彼は優れた批評性の持主であることを再評価した。

第二部では、透谷の「厭世」と東洋思想（陽明学・禅）・漢学、また江戸思想（武士道・儒教・粋の思想）との関連性を重点的に考察する。それを通じて、「厭世家」としての透谷が如何なる理由で自らを詩人と規定し、最後までそれを貫徹したのかを解明する。「厭世」思想を「詩人」と結び付けることで、始めて統一した透谷の全体像が見えてくることを主張したい。各章の内容は以下の通りである。

第五章「北村透谷と宗教—闘ぎ合う陽明学とキリスト教—」においては、キリスト教に一元化しがちな従来の透谷の宗教性の研究を相対化し、陽明学によるキリスト教批判という視点から、透谷の宗教問題を再考する。まず明治初期にキリスト教に入信しながら明治三〇年以降そこから離脱した多くの人が幕末の武家の出身であったという事実に着目し、この問題に潜んでいる日本独自の精神的な問題を透谷に絞って検討する。次に、明治初期の思想家たちの多くがキリスト教と関わる一方、幕末の陽明学の影響も強く受けていたことに着目し、透谷をはじめとする明治の思想家における陽明学によるキリスト教批判という側面を議論する。透谷の中でせめぎ合う陽明学とキリスト教の問題を追跡することによって、透谷が「知」なく「行」しかないと評価するキリスト教を懐疑する理由を明らかにした。また陽明学の知行一致説を活用する形で、透谷が最終的に知行一致の詩人、言い換えれば観察としての「知」と創作としての「行」という詩人の業を理論化したことを提示した。

第六章「北村透谷と江戸文化」においては、今まで看過されることの多かった透谷の江戸文化への造詣を吟味し、江戸文化に対する両義的な評価を検討する。江戸文化の中心思想である「粋」と「俠」を巡って、透谷が批判から再評価へと転じたプロセスを手がかりとして分析を加える。透谷は、近松門左衛門の心中物、井原西鶴の粋の文学に代表される元禄文学を批判する一方、幽玄の詩学を表現した松尾芭蕉、小説を通じ「義」や「俠」の精神を描き切った曲亭馬琴らに対して共感を持つ。「粋」と「俠」を「平民の初声」と再評価した透谷の、江戸文化に対する評価の両義性を通じて、詩人に導かれる「至粋」という理想を獲得したことを明らかにした。

第七章「北村透谷と東洋文学—東洋的ユートピアに基づいた創作—」においては、近代日本の劇詩の嚆矢をなした透谷の代表作『蓬萊曲』を取り上げ、『蓬萊曲』を支えている〈蓬萊山〉という舞台にテーマを絞り、その由来から発見された東洋的ユートピア

の性格を透谷が作品に活用し、多様な像を呈示した文学創作の手法を分析した。また、従来富士登山という作者の体験に基づくとされてきた〈蓬萊山〉という舞台設定が、実は別の意を籠めたものであることを探った。さらに、別篇「慈航湖」の中絶を巡って議論されてきた現在までの批評に対して、本章は舞台〈蓬萊山〉の考察を入口にして、一貫した視点と理論のもとに、別篇の深層的構造と結局挫折したこの作品の問題点を提示した。この課題を通じて、詩人を導く「創造的勢力」という概念を透谷が獲得した思想的経緯を示した。

第八章「感覚の近代化—北村透谷と東洋的楽器—」においては、三味線の音をめぐる耳の近代化という視点から近代化による聴感の変化を透谷に絞って議論する。透谷が武士と平民の趣味について「琴の音を知り、琵琶の調を知るものは、之を三絃の調に比較せよ、一方はいかに荘重に、いかに高韻なるに引きかへて、他はいかに軽韻卑調なるに注意するなるべし、斯の如きは武士と平民との趣味の相違なり。」（「徳川氏時代の平民的思想」）と述べた箇所注目し、彼がこうした三味線・琴・琵琶の聴覚的な表象を如何に思想的に活用し、詩論の図式を示したかを検討する。

江戸の音楽文化の中心的な役割を担っていた三味線が「軽韻卑調なる」音と聞こえるのは明治以後のことである。明治の近代化は、都市空間・服装・技術などの問題であると同時に、音に対する感覚の変化の問題でもある。そのため、この章では、三味線、琴、琵琶について語る透谷の言説の分析を通して、楽器と詩をめぐり明治以後の問題系も合わせて論じた。

後世から批判的に捨象される運命を歩んだ透谷の「厭世」思想であるが、その内実は重い。透谷が日本文学・思想にもたらした意義は大きいものの、これまで系統的に見直す研究が少なかったため、彼自身が忘れられた存在になりがちである。本研究で取り上げる彼の「厭世思想」は、日本の近代化への省察を一生のテーマとした透谷の果たした役割を示すと言える。その思想を上記八章の各視点から領域横断的に提示し、透谷の思想的な葛藤・努力・達成点などを示した。